

ともに 歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔を。暗闇に立ちすくんだ時、この記録が足元を照らす光となるように。そしてまた明日の朝を迎えられるように。朝日新聞社員がつづる。

子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た
子どもたちの記憶を刻みます

鈴木真衣さん 「12歳」

これからも過去を大事にしてね

2枚のチケットがある。
「仙台89ERS vs. 秋田
ノーザンハピネッツ」。地
元で人気のバスケットボールチームがホー
ムの仙台市体育館で、秋田のチームを迎え
撃つ試合だ。鈴木典行さんが知り合いに頼
んで2階席を手に入れ、娘の真衣さんと
もに観戦に行くはずだった。

日付は「2011年3月27日(日) 14:00
試合開始」。あの震災の16日後、試合は中
止に。でも典行さんは払い戻しはせず、そ
の2枚を大切に持っている。

典行さんと妻の京子さんの間には三姉妹
がいる。真衣さんは真ん中だ。姉の星奈さ
んが2歳の時に生まれた。典行さんの父は
病気で入院中だった。生まれたばかりの真
衣さんをビデオに写して父に見せた。誕生
の5日後、父は亡くなった。抱き上げても
らうことはかなわなかった。

よく泣かされていたが、真衣さんは星奈さ
んのことをいつも見ていたように、典行さ
んは感じていた。
「誰にでも優しく、物事をよく考える子
だった」
記憶にあるのは年下のいとこたちとよく
遊んでいた光景だ。子どもの世話をするの
が好きだった。
幼稚園に通っていたときに妹の滯(とど)さんが
生まれる。京子さんが入院している間、二
人の娘は典行さんが見ていた。昼間、会社
に行っている間、二人はバスで小学校と幼
稚園へ。典行さんは定時退社で急いで帰宅
し、父と娘たちの時間を過ごした。真剣に
なつて遊んでいた、と思う。

2004年春、今思えば貴重な時間だった。
自宅のある石巻市針岡はこの季節、田植
えのシーズンだ。5月の晴れた日曜、典行
さんら大人たちが田植え作業をしていた傍
らで、星奈さんと真衣さんは地元・芦(あし)早(はや)地
区の子どもたちと自転車で遊んでいた。
その時だ。星奈さんが言った。
「真衣乗れだっちゃー!」
近所の友達の自転車を借り、初めて補助
輪をつけずによろよると走り出した。6歳
だった。その日のことを、典行さんは今も
鮮明に覚えている。
自転車で乗れるようになると、それはそ
れで心配だ。芦早は車が少ないせい、ス
ピードを出していることが多い。
飛び出しはだめ、左右をよく見て、と何
度も注意したが、夢中になって走り回る。
とうとう自転車を取り上げた。二人は泣
いて謝った。もちろん本気で取り上げる気
などなかった。娘たちの成長は父母にとつ
ての喜びなのだから。

ミニバスケットに熱中

大川小学校に入学したのは翌年の春。典
行さんの母校だ。2歳上の星奈さんと一緒
に通学した。

低学年の頃は走るのが苦手だった。だが
4年生の時から変わっていく。地元スポー
ツ少年団の女子ミニバスケットチーム「大川ウ
ィングス」への入団がきっかけだった。
その年、前任のコーチが辞めることに、

明日の風

今年の尾根は霧が
かかっていた。登山
者は昨年よりははや
少ないが、不思議な
清々しさがここには

ある▼8月12日、群馬県上
野村・御巢鷹の尾根は慰霊
の登山者が集った。日航
ジャンボ機墜落事故から31
年。今年は東北の被災地か
らも遺族の方々が何人も訪
れた▼紫桃隆洋さんは4回
目だ。3年前に初めて登り、
以後、石巻から毎年、車を
運転して訪ねて来る。震災
時、次女の千聖さんは大川
小学校の5年生だった▼名
取市閉上で「語り部」を続
ける丹野祐子さんは2回目。
昨年はあえて8月12日をは
ずしたが、今年は慰霊の式
典に参加した。中学1年
だった長男の公太君はあの
日、公民館のグラウンドに
一緒に避難したが、津波が
来たときに別れ別れになつ
てしまった▼田村孝行さん、
弘美さん夫妻も昨年に続い
て2回目。長男の健太さん
は、12人が犠牲になった
七十七銀行女川支店の行員
だった▼御巢鷹の尾根には
東北の被災地だけでなく、
全国各地での事故や災害、

なり、次のコーチを選ぶ親たちの話し合いで典行さんに白羽の矢がたった。

大川中学校のバレーボール部で県大会に出場し、優勝した経験を持つ。大人になってからも地域の仲間たちとチームをつくり、スポーツは続けていた。しかし、バスケットボールの経験はない。

迷わず引き受けた。ルールやプレーは学べばいい。星奈さんと真衣さんもすでにウイングスのメンバーだ。

8月の「下級生大会」が、コーチとしての典行さん、そして選手としての真衣さんのデビュー戦となる。

試合中、真衣さんは相手選手のアウルを受け、2本のフリースローを得る。

届くだろうか……。はらはらしながら典行さんは「線を踏むなよ」と声をかけた。

1本目、ボールはリングにあたった。あと少し――。

「上に思いつきジャンプしてシュー

トだぞ」。真衣さんはうなずいた。

2本目、ボールはリングを抜けて見事にゴール。歓声がわいたが、審判のホイッスルが聞こえた。ジャンプの時に白線を踏んでしまったのだ。残念――。

初ゴールは幻に終わったが、それからフオワードで活躍するようになる。5年生になると土曜、日曜は試合か練習。高学年の時はいつもミニバスケットに明け暮れ、どこかへ遊びに連れて行った記憶が、典行さんにはあまりない。スポ少のコーチは、試合



になれば審判もしなくてはならない。経験のなかった典行さんも周りに助けられ、少しずつ腕を上げていった。

ミニバスケットを通して一緒に成長していく。それが父と娘の絆であり、かけがえのない思い出でもあった。

父の思い

コーチとしての父を真衣さんはどう思っていたらう。典行さんは時折、そう考える。ほかの選手よりも厳しく接していたのは確かだ。

あの日も叱責した。

6年生の2月、地元・大川地区が主催する「ビッグバンカップ」。2日目の第1試合で真衣さんは突き指をする。

「緊張感もなくプレーしてっから突き指なんてすんだ。痛いのか」

泣きながら答えた。

「痛くない」

それが真衣さんの最後の試合であり、大川ウイングスの最後の大会になった。

3月11日、東日本大震災……。真衣さんたちのいた大川小学校の一角を津波が襲った。典行さんが寸断された道を越え、現場にたどり着いたのは2日後の3月13日。学校近くの山すそで、典行さん自身が真衣さんを見つけた。

ウイングスの子どもたち14人で、助かったのは2人だけだった。

7月、メンバーの慰霊祭。典行さんは一人ひとりに言葉を贈った。真衣さんにはこう伝えた。

「親がコーチで嫌だったろうな。いつつも怒られて。でも言われたことを素直に受け止めて、失敗しても何とか出来るようになるう、と努力していたのは感心しました」。コーチとしての最後の仕事だった。

8カ月の月命日、姉の星奈さんがブログにこんなことを書いていた。

「妹が見つかったって言われて大川小に妹を探しに行ったりしたこと、絶対に忘れない!!」。4月には星奈さんの通う大川中学校に入学するはずだった。

保育士になるのが夢だった。可愛がっていた二人のいとも被災し、亡くなった。

震災の春、妹の滯さんは小学校に入学する。持ち物に名前を書いてくれたのは、真衣さんだ。滯さんは今もそのことをよく覚えてる。5年が過ぎ、真衣さんと同じ6年生になった。

震災2日前、三陸沖で地震があった日、真衣さんは二十歳の自分に宛てた手紙を書いていた。こんな言葉がある。

「これからも過去を大事にしてね」

何かを感じていたのだろうか。先に何があろうとも、これまで歩んできた過去はいつまでも生き続けている、と。

芦早の自宅には、典行さんの自作のバスケットゴールがある。近所の子どもたちみんな練習していた。中学に入ったらゴールの高さを上げるはずだった。今もそのまま庭先に置かれている。

で犠牲になった人々の遺族が訪ねる。日航機事故遺族による「8・12連絡会」事務局長の美谷島邦子さんは分け隔てなく笑顔で迎え入れる▼31年という時の流れがこの場所を「命」を考える地にしてきた。美谷島さんや遺族の方々の歩みが、たくさんの思いを積み重ねてきたからだ▼「私たちの山に来てくれて感じるがあるならば、30年間、いろんな人が流した涙がそこにあるからだと思う」。以前、この紙面で紹介した美谷島さんの言葉だ。命を思うとき、その言葉はだれの心にもしみわたる▼7月末、佐藤美香さんが訪れた。長女の愛梨さんが乗っていた幼稚園の送迎バスは津波に襲われ、4人の園児とともに亡くなった。初めて来た御巢鷹は12日とは違い、登山者も少なく、静かなたたずまいだ。一帯には家族が思いを込めた、それぞれの墓標が立つ▼佐藤さんは言った。「31年間、この場所が家族から愛されてきたのですね」。その思いをだれもが共有できる場所として、御巢鷹は存在し続けている。

雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話が続けよう。

[第2回]

家族みんなをなごませた末っ子

病院前の県道わきにトラックを止める。運転席を降り、病院1階の厨房へ向かう。

厨房の窓辺で年配の調理員が気づき、声を上げる。

「あら、お兄ちゃん」

それは、妹である主任栄養士、佐々木弘江さんにならった呼び方だ。妹も厨房の扉を開け、「お兄ちゃん」と出てきた。

「ぴょん」と弘江は出てくるんだ。運送会社勤務の加藤伸幸さんは配達途中の光景を思い出す。背丈が145センチにわずかばかり届かない小柄な妹が今もまぶたに浮かぶ。

弘江さんは3人きょうだいの末っ子。姉と兄がいる。

4歳上の兄、伸幸さんは、休日の釣りの後、雄勝町の末っ子の家に立ち寄った。

志津川湾で釣ったサバは竜田揚げにしてくれた。身はやわらかく、ほわほわ。

マダラもすぐに料理してくれた。「怖い怖い怖い」と言いながら手際よくさばく。魚の目は苦手なのだ。

兄が痛風になると、妹は助言

した。「呑みすぎには注意しないとだめだね」「鶏肉も、皮を食べなければ低カロリーなんだから、いいんだよ」……。

6歳上の姉、理恵さんは、妹のいなりずしを覚えていた。揚げは母から受け継いだ味だ。

やさしい薄味の母のいなりずしは、きょうだい3人の運動会や遠足の定番だった。

8人家族だった。祖父母と、父の妹である叔母と一緒に暮らした。

祖父の倉三さんは海軍勤務で、父は神奈川県横須賀生まれ。祖父も、祖母のノブさんも、話す言葉になまりはなかった。

父の圭宏さんは、戦中、曾祖父の郷里の旧登米郡の、合併して今は登米市になった豊里町へ疎開し、そこで育った。

小学校教諭になり、教職員組合の活動にも取り組んだ。組合史を綴った書物が家の本棚に並んでいた。

母の孝さんは、郵便局に勤めていた。当時はまだ郵便局が電

話事業を手がけており、しばらく電話交換手を務めた。

夜勤がある。父もその頃は当直勤務があり、両親不在の夜が生じる。姉が小学校に入る頃、郵便業務に移った。

本棚に日本文学全集などをそろえる読書家の母だった。

1970年代初期。

末っ子の弘江さんが3歳の時、一家は、今は石巻市の旧桃生郡の桃生町から、隣町の河南町へ引っ越した。

共働きの両親に代わり、一緒に暮らす叔母が、小さな子の良き遊び相手になってくれた。

叔母には知的障害がある。姉と兄は、思春期に叔母の幼さをうとんだ自分たちを覚えているが、末っ子が叔母を遠ざけたという記憶はない。

生来の思いやりで家族みんなをなごませる末っ子だった。

夜は茶の間のテレビの前で団欒。「リビングむいたよー」。誰かが気づく。「弘江ちゃん寝たねー」。

幼子を抱いて寝室へ。

姉が東京の大学へ進学して部屋を空けるまで、末っ子は両親と寝ていた。

姉自身の思い出をたどる。中学生の頃から台所仕事を手伝った。正月の引き菜作りは好きになれなかった。寒い台所で、大根、ニンジン、ゴボウの千切りを大量に作り、ゆでて絞って玉にする。雑煮に入れる

小々な妹は兄へ泣きながら訴えた

兄の伸幸さんには、忘れられない幼少時の出来事がある。

新築の家の庭で小さな兄が棒切れを手にしたのを見て、幼い妹は「突っついてー」。剣士のまねをしてほしかったのか。棒は妹のみぞおちへ。痛がる妹に兄は真つ青。病院で診てもらった。けがはなかった。

新しい家は、河南町中心街の前谷地に構えた。石巻工業港から約15キロ内陸の地だ。

家並みの向こうには田んぼが

広がり、その先を縁取るようにならかなな丘陵が横たわる。

前谷地小学校に入った。

「缶蹴りしよう」。兄と一緒に

野菜の下ごしらえは一日がかりだった。

寝る前によく母と話した。社会情勢にも詳しい母は、こんなことも言っていた。

「続けられる仕事に就きなさい。何があっても生きていけるだけの仕事はしなくちゃね」

姉が大学4年の時、男女雇用機会均等法が成立した。

に空き缶を探し、田んぼの間の一本道をてくてく歩いた。青田を駆けぬけてきた風が、草いきを吹き払う。

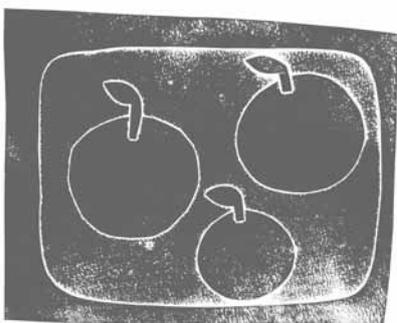
一本道は前谷地中学校の通学路。冬の朝、シャンシャン、シャンシャン、と車のタイヤやチエーン音が枕元へ響き、積雪を告げる。道路と田んぼの境がわからないほど積もった日も、中学校まで歩いて通った。

妹の誕生日は12月。

兄はお菓子を詰めたサンタクロースの靴を贈った。お菓子を少々失敬する楽しみもある。

母は仕事帰りにJR石巻駅そばの洋菓子店「マメヤ」でショートケーキやドーナツを買ってきた。カラフルなアイシングのドーナツに兄も喜んだ。

小さな仲間も家族に迎えた。兄は捨て犬を次々拾ってきて、



「缶蹴りしよう」。

女川町議会 福島を視察⑭

「フレコンバッグ」は何? 大熊町民はわかる

あの日から5年余。私たちは福島第一原発事故について何を思ったのか。今、何を承知しているのか。2014年7月、女川町議会は福島県の被災地を視察した。その視察団に應對した2人を今春、私は再訪した。1人目、福島県の大熊町議会事務局・池沢洋一氏(59)の話を今回と次回の2回に分けて記す。

あの時。1万1505人が暮らす大熊町の海岸にも津波は到達。11人が犠牲になった。さらに今春までに115人が「震災関連死」と認定された。

原発は町北端から隣接の双葉町にまたがって立つ。事故後、大熊町議会事務局は約100キロ離れた福島県会津若松市へ移った。今も全町避難が続く。

池沢氏を訪ねる前、私は最新号の町広報誌に目を通した。表紙にひと房の桜の花の写真を大きくあしらう。「ふるさとの春 大野小の桜」とある。編集後記を読んだ。「校庭では、何段も積まれた黒いフレコンバッグを背景に、花びらの淡いピンク色が映えていました」

「フレコンバッグ」に注釈はない。大熊町民に伝わるのだろうか。池沢氏に尋ねると、「どなたもわかるはずですよ」。

「私も一昨日は自宅に戻って、家のごみを入れるのに使いました。まだ使っていないフレコンバッグが何十袋も、うちに置いてあるんですよ」

フレキシブル・コンテナ・バッグの略称。見た目は、石巻市や女川町の岸壁にある大きな土嚢と変わらない。だが、中身は異なる。放射性物質で汚染された土などが詰まっている。

町広報誌の編集後記は綴る。「カメラを構えると、どうしても黒い袋が入ってしまう。最初は困りましたが、どちらも町の再生や復興のシンボルと言えるのではないかと思い、方針を変更。黒い袋も入れて撮影することにしました」

ここを池沢氏に読み解いてもらった。「あれから5年、立ち入りもできず、荒野となった地で、除染が進んでいる。今こうやって除染物が積まれるのを見せると、まもなく自由に立ち入りできるかもしれないねと期待を抱かせる。その意味ではシンボルなんです」

しかし、その袋の置き場「中間貯蔵施設」をめぐる、町民に「自分の存在価値

を消し去るような決断」が迫られているのだと池沢氏は打ち明ける。

「中間貯蔵施設」の建設予定地は大熊町と双葉町。運び込まれる汚染土などの廃棄物は2200万立方メートルと見込まれている。大抵の袋は1個1立方メートル。それが2200万個である。宮城県の人口が約230万。その10倍近く。東京都の人口が1400万弱。それを超える数。

政府が施設建設地を大熊町と双葉町に集約すると表明したのは、14年3月。用地取得はまだ道半ば。地権者は2365人に上る。

池沢氏は語る。「福島県自体、あちこちにフレコンバッグがある。それを一日も早く片付けなければならない。それにはこの施設を造らなければいけないという理屈は、地権者のみなさんもよくわかっている」

ただし、と断る。「先祖代々苦勞して整備してきた山や農地を手放すことは理由のいかんにかかわらず、ご先祖に何と詫びたいのか、自分はもう終わりだと誰しも思うんです。頭ではわかっていますが、心では受け付けられないんです」

池沢氏自身は地権者ではない。が、代々農業を営んできたので理解できる、と思ひやる。環境省には、用地交渉に際し、地権者と同じ気持ちになれるまで対話を重ねてほしいと求めている。「普通の許認可事務のように『契約書をお持ちしました。ハンコを押して下さい』と言っても、押す人はいません」

もう一つ汲んでほしいと願う。「私たちからすれば、自分の土地を一方向的に立ち入り禁止にされて、これまでほとんど縁のなかった会津地方へ避難し、5年もおいておかれたあげく、帰れないまま『財産を全部売りなさい』と言われていたのです」

——「中間」の施設なので土地はまた戻ってくる。そう考えられるはずですが、本当に「中間」になるでしょうか。

「30年後に県外搬出して最終処分しますと国会で、法律で、定めたのです。けれど、具体的なことは示されておらず、空手形に等しいと心配する人も多いです」

法律名は「中間貯蔵・環境安全事業株式会社法」。14年11月の法改正で、「国は中間貯蔵開始後30年以内に福島県外で最終処分を完了するために必要な措置を講じる」と定められた。

2匹飼った。妹は小学生の時に夜店で白ウサギを買ってもらった。ミートと名付けられたウサギは10年の長寿を全うした。母は、きょうだいに書き初めを教えた。母が姉や兄につきつきりになるのをよいことに妹はサボタージュ。姉はさらに母の高等女学校時代の恩師からも書道を教わり、上達する。

父は、姉妹のため、石巻駅近くの楽器店「サルコヤ」でピアノを購入した。人気のヤマハは品薄。「HOFMANN」と記してあるヨーロッパ製を選んだ。姉が小学生の頃だ。それから姉は高校1年まで習った。これも妹は続かなかったが、就職後に一時期、石巻駅そばのヤマハ音楽教室へ通った。

父母は毎日新聞に目を通す。漫画雑誌『りぼん』や『なかよし』を読んでいた妹。飾り気なく、いつも素顔だった。朝が苦手な妹は、1駅先、JR涌谷駅そばの涌谷高校を選んだ。それでも遅れそうになり、父が車で送ったこともある。福島県の郡山女子大学短期大学の食物栄養専攻で学んだ。

卒業時、母の妹である叔母から、雄勝町立の雄勝病院で栄養士を募集中だと聞いた。叔母は病院の薬局で働き、叔母の夫は雄勝町職員だった。病院に就職した。町職員の親睦会で、8歳上の佐々木勇人さんと出会った。5年ほど交際し、結婚を決め、母に報告した。母は困惑し、兄

に相談した。勇人さんは腎臓病で移植手術を受けていた。兄が電話口で切り出すと、妹は泣きながら訴えた。「このひとは、私が看なければだめなの」え、弘江って、こんなだったの。兄は驚いた。考えている。覚悟している。小さかった妹は、いつの間にか大人になっていた。